

日本の子どもの発達資産に関する研究

－「発達資産プロフィール」調査の分析を中心に－

山口県立大学 相原次男
山口県立大学 ウィルソン・エイミー
山口県立大学 岩野雅子

Summary

‘Developmental Assets’ are the assets which are necessary for children to mature into healthy, socialized adults. Conceived by Search Institute, the Assets are divided into 20 ‘External Assets’, including support, boundaries and expectations, etc. which should be provided by adults to protect and maintain a healthy and educational environment, and 20 ‘Internal Assets’, including the development of positive values, an enjoyment of learning and a positive self-identity. The reliability and validity of the Assets have been verified in numerous research projects and the 40 Developmental Assets are used regularly in educational facilities, and youth-oriented and community groups in the United States.

The purpose of this research is to investigate the Developmental Assets of children in Japan by translating and implementing the Search Institute’s ‘Developmental Assets Profile’, a measurement of the level of the Developmental Asset Categories for children between the ages of 11 and 18. While the Developmental Assets have been previously introduced in Japan, there have not yet been any surveys conducted directly on children. This research is the first attempt to measure the level of Developmental Assets of Japanese children directly.

Through analyzing the data collected from over 14,000 Japanese children, it was found that the total level of Developmental Assets was lower than that of the American sample provided for comparison across all 8 Asset Categories, that the average level for almost every item in all the categories went down for each educational level (elementary, junior high school, high school), and that there was virtually no difference in the results by gender.

Keywords: Developmental Assets, External Assets, Internal Assets, Support, Positive Identity, Boundaries and Expectations

I 問題の所在と研究の目的

1. 発達資産への着目

多様な価値が尊重される現代社会あって、子どもが十全な成長・発達を遂げ、社会に首尾よく適応していくためには、家庭や学校や地域社会が共有すべき一定の価値基準や行動基準が求められている。

わが国には家庭教育や地域教育に関するアンケート調査は数多く存在する。しかし、子どもが経験すべき、また獲得が期待される一定の価値や行動基準に基づくものは少ない。また、それを客観的に評価する尺度や方法も必ずしも開発されていない。日本社会に有効な実践的プログラムが少ないのは、このことと無関係ではないであろう。

日本のこのような状況に対して、アメリカ社会には、科学的にも評価の高いアンケートやその結果に基づく教育実践プログラムが数多く存在する。その代表格の一つが、「発達資産」(Development assets)の有無や高低を測るアンケートとその結果に基づき発達資産の

獲得・蓄積を目的に開発された教育実践プログラムである。

発達資産という概念は、アメリカのサーチ・インスティテュート（オハイオ州・ミネアポリス市）が提唱した概念で、今日では「40の発達資産」としてアメリカのみならず、カナダやヨーロッパの多くの国で周知されている。

発達資産とは、子どもの成長・発達の各段階で身に付けることが期待される、また獲得することが望ましいとされる能力や態度、またその支援体制を意味している。発達資産の概念の生みの親であるP.ベンソン（サーチ・インスティテュートの所長）によれば、発達資産とは「青少年の教育や健康面でよりよい発達を促す環境的諸力及び内面的諸力」である⁽¹⁾。

40の発達資産は、大きく外的資産（external assets）と内的資産（internal assets）に分類される。外的資産は、子どもを取り巻く環境、具体的には家庭、学校、地域などの場やその場で生活している人々から受け取る好ましい経験を意味し、「支援」（6項目）、「規

範や期待」(6項目)、「エンパワーメント」(4項目)、「時間の建設的な使用」(4項目)の4つのカテゴリから構成される。内的資産は、子どもの好ましい心理的(内部的)な成長・発達を反映する特性や行動で、4つのカテゴリ、「学習への参加」(5項目)、「肯定的な価値観」(6項目)、「社会的能力」(5項目)、「肯定的なアイデンティティ」(4項目)から成る。

ところで、発達資産の40の項目は、特定のアンケートに基づく因子分析等の方法で抽出されたものではない。サーチ・インスティテュートが、子どもの成長・発達に関する各種の研究団体や組織、機関で実施された研究調査データなどを収集・分析し、そこで共通に見出される子どもの成長・発達に資する項目を整理し、「40の発達資産」として定式化したものである。

1990年以降、サーチ・インスティテュートは、「40の発達資産」をベースに11～18歳の子どもを対象に数多くの調査を実施(すでに300万人以上のデータの収集・分析)し、次のような結果が公式に表明している。例えば、子どもが蓄積している発達資産項目が多ければ多いほど、子どもの行動は健康で積極的であり、逆に、資産項目が少なくなるにつれ、子どもの行動は危険で否定的な行動になる傾向がある。より具体的には、発達資産の項目の蓄積が多ければ多いほど暴力行為や飲酒や違法ドラッグの使用が少なくなり、社会性や市民性や積極性が向上する、などである⁽²⁾。

発達資産の調査は、アメリカの子ども(青少年)が身に付けている、また身に付けることが期待される資産項目の実態把握だけではなく、資産を高める数多くの実践的なプログラムやその評価にも活用されている。例えば、親のための家庭教育セミナーや学校の教師や学校運営者を対象とした教育プログラム、また、発達資産を増やすための専門家養成のための講座、デベロプメンタル・アセット・トレーナー(発達資産訓練士)の育成講座なども全国各地で実施されている。

発達資産は、資産の蓄積という子どもの発達に焦点を当てたものであるが、子どもが資産を蓄積するにはそれを支える場(家庭、学校、地域など)やその場で子どもとかかわる大人たち(親や教師や地域の人々)自身の資産の蓄積が求められる。発達資産論は、子どもの資産の蓄積だけでなく、発達資産を豊かに蓄積した地域社会の形成を目指している。アメリカには既に、発達資産を豊かに蓄積したコミュニティを表彰する制度が存在している。

ところで、アメリカにおける発達資産の概念の一般化にもかかわらず、わが国での発達資産の概念の紹介

や関連の研究は意外と少ない。その中で、国立教育政策研究所社会教育実践センター「子どもの成長過程における発達資産についての調査報告書」(平成18年4月)及び立田慶裕・岩槻知也編著『家庭・学校・社会で育つ発達資産』(北大路書房、2007)は先駆的な研究として評価できる。

前者は、「40の発達資産」を目安とし、教師や社会教育関係者など専門家へのアンケートを通して、日本の現状に応じた子どもの発達資産を形成するために、家庭や学校や地域及び行政がどのように取り組むべきかを提案している。後者は、発達資産の形成を青少年に限定せず、幼児から高齢者までの課題とし、生涯学習研究の新しい切り口を提示しており、いずれも今後のわれわれの研究にとって示唆的で、大いに参考となる。ただ、両研究とも、子ども自身を対象にした「発達資産」に関する調査は実施していない。

本研究の目的大きく二つある。一つは、サーチ・インスティテュートが開発した「発達資産プロフィール」調査を日本の子ども(小中高生)を対象に実施し、日本の子どもの発達資産の蓄積状況を明らかにすることである。もう一つは、アメリカの子どものデータ(サンプル)との比較を通して、資産蓄積の日本の特徴及び問題点を浮き彫りにし、資産蓄積に向けた支援体制の在り方を探ることにある。

2. 「発達資産プロフィール」調査の特徴

サーチ・インスティテュートは40の発達資産の枠組みを基礎に、用途に応じた多様な発達資産に関する調査を開発している。最も広く採用、活用されているのは、「Attitudes & Behavior Survey」(「A&Bサーベイ」=「態度と行動調査」)と「Developmental Assets Profile」(「DAP」=「発達資産プロフィール」調査)である。

「A&Bサーベイ」は156項目から構成されており、40の発達資産項目の一つひとつの有無をより詳細に測定できるとともに、発達資産とハイ・リスク行動(麻薬や喫煙やアルコールや性的関係)や逆の肯定的な行動などの関係を測定する上で有効であるとされている。ただ、この調査には50分～1時間の回答時間を要する点、またアンケート票が有料で、しかも分析についてはサーチ・インスティテュートしかできないという難点がある。

もう一つは本研究で使用する「発達資産プロフィール」調査である。この調査は、全部で58項目(外的資産26項目、内的資産32項目)から構成され、すべての

項目は4段階のスケール(「非常にそうだ」から「ほとんどそうでない」)でチェックすることになっている。この調査の大きな特徴は、子ども(11歳~18歳)一人ひとりの発達資産を、先に見たカテゴリー別(外的資産は4カテゴリー、内的資産は4カテゴリー)にスコア化するところにあり、個人の発達資産の「プロフィール」の概略を理解する上で有効だとされている。また、各資産カテゴリーのスコアの変化を定期的(3か月ごと、半年ごと)に調査することが比較的容易なことから、教師やカウンセラーやソーシャルワーカーなどの専門家による個々の子どもの個人指導や各種のプログラム評価に適している。

「発達資産プロフィール」調査のもう一つの特徴は、カテゴリー別の発達資産のスコア化とは別に、具体的な資産項目(58項目)を文脈や関連性等を考慮して発達資産を育てる(育つ)5つの場(個人、社会、家族、学校、地域)ごとのスコア化が工夫されている点にある。

5つのそれぞれの場ごとのスコアを見ることによって、発達資産がどこでどのように蓄積されているのか、また発達資産を蓄積していく上で誰がどのような役割を果たすべきかを明らかにすることができる。

「発達資産プロフィール」調査は以上のような特徴や有効性を持つとともに、何よりも短時間(10分前後)で回答でき、分析も比較的容易であるという利点がある。また、いわゆる「40の発達資産」の各項目のセンテンスの多くは、どちらかといえば抽象的であるのに対して、「発達資産プロフィール」調査では、58項目のほとんどが小学5、6年生程度であれば誰でも理解可能な生活言語で表現されている。この工夫は、各カテゴリー別発達資産のスコアの信頼性を高める上で有効に作用していると言える。

本研究で「発達資産プロフィール」調査を採用したのは、以上のような特徴や有効性、また利点等を総合的に評価したからである。

なお、本調査の実施については、作成者であるサーチ・インスティテュートとの交渉で特別の許可をいただいていることを付記しておきたい。

II 日本の子どもの発達資産の蓄積状況 - 「発達資産プロフィール」調査から

1. 調査の概要

ア 調査の期間

2008年11月から2009年3月。

イ 調査の対象

10都道府県(北海道、東京都、兵庫県、岡山県、島根県、山口県、愛媛県、福岡県、佐賀県、熊本県)の小中高生(小学生は5、6年生、中学生は1、2年生、高校生は1、2年生)。

ウ 調査の方法

まず、知人(大学関係者、校長)に調査を依頼し、その知人を通して都市部、農村部の学校それぞれ2、3校に調査を依頼してもらった。諾の回答があった学校に調査票(諾の回答の際に、調査票の必要部数を明記してもらった)を郵送。

エ 調査票の回収数

回収数は全体で14,410。内訳は小学校(34校)4,530、中学校(34校)5,228、高等学校(13校)4,552。

オ 分析視点

①外的資産の4カテゴリー、内的資産の4カテゴリーのスコアを学校種別(発達段階別)及び性別(男女別)に分析する。②発達資産を育てる5つの支援の場それぞれのスコアを、学校種別(発達段階別)、性別(男女別)に分析する。なお、分析に際しては、一部アメリカのデータとの比較を試みる。

2. 結果の概要

(1) 発達資産の日米比較

まず、全体の結果から見てみたい。図表1は、発達資産をカテゴリー別に見たスコア分布とスコアを示す。「支援」(8項目)、「エンパワーメント」(6項目)、「規範と期待」(9項目)、「時間の建設的な使用」(4項目)の4つのカテゴリーが外的資産、「学習への傾倒」(7項目)、「肯定的な価値観」(11項目)、「社会的能力」(8項目)、「肯定的なアイデンティティ」(6項目)の4つのカテゴリーが内的資産のスコアである。比較の意味で、アメリカのデータを示しているが、この数値はアメリカを代表するものではなく、ミネソタ州のある地域における調査結果に基づく⁽³⁾。

図表に示したスコア(数値)は、サーチ・インスティテュートが明示したマニュアルに基づき、次のような手順で算出した。例えば、日本の例でみると、「支援」の数値は18.8となっている。回答者は一つひとつの項目について、「非常にそうだ」(3点)、「そうだ」(2点)、「ときどきそうだ」(1点)、「ほとんどそうでない」(0点)の4段階で回答するようになっている。支援というカテゴリーは8つの項目から構成されているので、各項目のスコアを加算し、8で除して平均点を出す。

図表1 発達資産のカテゴリー別結果 日米比較

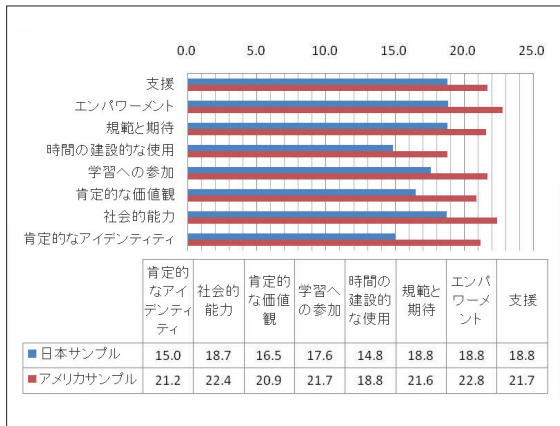


表1 カテゴリー別の具体的項目スコア

外的資産カテゴリー		平均	内的資産カテゴリー		平均
支援	親にアドバイスを求める	1.5	本を読むことや読んでもらうことが好き	1.7	1.7
	私の親は成功できるように手助けしてくれる	2.1	学校を大切にしている	1.8	2.1
	私を心配してくれる近所の人がいる	1.7	宿題をする	1.5	2.1
	私の学校は生徒を大切にし、応援してくれる	1.9	学校が楽しい	1.7	1.5
	親以外に私を応援してくれる大人がまわりにいる	1.9	積極的に新しいことを学ぼうとしている	1.8	1.7
	私の家族は私を愛し、支援してくれる	2.1	自分のためになることに挑戦するよう励められている	1.8	1.8
	私の親は適切なアドバイスしてくれる	1.9	学校での学習もその他の活動も真んできている	1.6	1.6
	家庭で安心・安全に過ごせる	2.4	正しいと思うことは、はっきりものを言う	1.7	1.7
エンパワメント	他人に大切にされたり、感謝されたりしていると思う	1.6	タピオや酒などの飲み物は飲まない	2.6	2.6
	学校で安心して過ごせる	2	他人を手助けすることは大切だと思う	2.5	2.5
	家の手伝いや家族の決定ごとに加わっている	1.8	自分がやったことには責任が負ける	1.8	1.8
	人に役立つ仕事や役割を与えられている	1.3	言いにくくても本当のことが言える	1.5	1.5
	私は安全な地域に住んでいる	2.2	自分の地域を良くするための活動に参加している	1	1
	私にとって良い手本となる友だちがいる	2.4	健康的な習慣を身につけている	1.7	1.7
	私の学校には明確な規則がある	2.1	他人の手助けをするよう進められている	1.7	1.7
	私にとって良い手本となる大人がまわりにいる	2	社会問題の解決に役立ちようとしている	1.2	1.2
規範と期待	私を育て、能力を伸ばすように励ましてくれる先生がいる	1.9	他人を尊重する態度が育っている	1.6	1.6
	私の家には守らなくてはならない明確な規則がある	1.4	地域の人のためになることを自分から進んでいる	1	1
	私の家族は学校で勉強を頑張るように励ましてくれる	1.9	危険なものや健康に悪いものは避ける	2.1	2.1
	私を見守ってくれる近所の人がいる	1.7	新しい友達をつくるのが上手	1.5	1.5
	私の学校は規則を公正に守っている	1.7	楽しみや喜びなどをきちんと表現できる	1.9	1.9
	私の家族は私がどこで何をしているかを知っている	1.8	先を見通して適切な判断ができる	1.7	1.7
	お寺、神社、教会などの活動に参加している	0.7	悪い誘いを断ることができる	2.3	2.3
	スポーツ、クラブ、その他の活動に参加している	2.2	人を傷つけずに争いを解決できる	1.6	1.6
設想的な利建	音楽、劇、芸術などの創造的な活動に参加している	1.2	自分と違う人を受け入れることができる	1.9	1.9
	家で親と一緒に有意義な時間を過ごしている	1.9	他人の気持ちに共感できる	1.9	1.9
			自分の人生や将来を自分でコントロールできる	1.6	1.6
			自分のことが好き	1.1	1.1
			自分の将来に希望がもてる	1.6	1.6
			いいいらした気持ちをよい方法で解消できる	1.5	1.5
			難しいことに出会っても乗り越える力がある	1.6	1.6
			生きることに目的意識を見つけている	1.6	1.6

それに10を掛けた数値が各カテゴリーのスコア（「支援」18.8）となる。（他のカテゴリーの数値も同様にして算出。）

以上の手続きで算出されたスコアは、次の4つのスケールで評価される。最高スコアは30で、30～26の場合「Very Good」、25～21は「Good」、20～16は「Fair」、15～0は「Poor」と評価される。

以上の基準に基づき、結果をみてみよう。

スコアを全体的に見ると、日本の子どもはアメリカの子どもと比較して、8つのすべてのカテゴリーで3～6ポイント低い。また、日本の子どもの場合、4つのスケールの中の「Good」に入るカテゴリーは一つもない。アメリカの場合は6つのカテゴリー、「肯定的な価値観」（20.9）を含めると7つのカテゴリーで「Good」の水準に入る。調査内容がアメリカの子どもに現実に合わせて作成された点を考慮しても、またアメリカのサンプルが必ずしも典型的でない点を差し引いたとしても、日本の子どものスコアは低いと言わざるを得ない。

日本の子どものスコアを外的資産と内的資産の各カテゴリーで見ると、前者の方が後者に比べて相対的に高くなっている。しかし、外的資産については「時間の建設的な使用」、内的資産では「肯定的なアイデンティティ」が、それぞれは14.8、15.0と「Poor」水準に止まっている。アメリカの子どもの場合、「時間の建設的な使用」のスコアは18.8と高くはないが、「肯定的なアイデンティティ」のスコアは21.2と高く、日本の子ども（15.0）と比較して極端な違いを見せている。

(2) カテゴリー別の具体的項目スコア

図表1はカテゴリー別に見たスコアであり、各カテゴリーにどのような具体的な項目が入り、どのようなスコアを示しているかを理解することはできない。そこで、日本の子どもに限定して、各カテゴリーを構成している具体的な内容項目のスコアから発達資産の蓄積状況を見てみたいと思う。

表1は、各カテゴリーを構成する具体的項目のスコアを示す。なお、ここに示す各項目のスコアは、先に見た算出基準（1項目最高3点）に基づくが、10を掛けてないスコアである。

表から分かるように、外的資産の26項目の中で、2.1以上のスコア（「Good」）を示した項目が7項目ある。「支援」のカテゴリーでは、「私の親は成功できるように手助けしてくれる」(2.1)と「私の家族は私を愛し、支援してくれる」(2.1)の2項目である。「エンパワメント」では、「家庭で安心・安全に過ごせる」(2.4)と「私は安全な地域にすんでいる」(2.2)の2項目。「学校で安心して過ごせる」(2.0)も含めると3項目になる。「規範と期待」では、「私にとって良い手本となる友だちがいる」(2.4)と「私の学校には明確な規則がある」(2.1)の2項目。最後の「建設的な時間の使用」では、「スポーツ、クラブ、その他の活動に参加している」(2.2)である。

逆に、1.5以下（「Poor」）の項目を見ると、全体で5項目ある。「支援」の中では、「親のアドバイスを求める」(1.5)。「エンパワメント」のカテゴリーでは、「人に役立つ仕事や役割を与えられている」(1.3)の項目。「規律と規範」では、「私の家には守らなくては

ならない明確な規則がある」(1.4)の項目。「建設的な時間の使用」の категорияでは、「お寺、神社、教会などの活動に参加している」(0.7)と「音楽、劇、芸術などの創造的な活動に参加している」(1.2)の2項目である。

以上から分かるように、各カテゴリーを構成している具体的な項目の中に、「Good」と「Poor」の項目が共存している。アメリカの子どものデータはないが、日本の子どものデータから外的資産の蓄積状況について、いくつかの特徴を指摘することができる。

まず、支援のカテゴリーでは、子どもは家族・親から愛情はもとよりアドバイスや手助けなどの支援を受けている。学校や地域の支援も決して少なくない。ただ、子ども自身は親にアドバイスを求めるという積極性が欠けている。視点を換えて言えば、子どもの家族や親への依存度が高いと言える。

エンパワーメントについても課題は多い。子どもは家庭や学校や地域の中で安心・安全に過ごせる環境に生活している。この意味で、子どもは自らの能力や個性を発揮する基礎的条件は整ってはいる。しかし、地域でも家庭でも、子どもに力をつける上で必要な役割を付与していない。他人に大切にされている、また感謝されていると思う子どもが少ないのは、このことと関係していると思われる。

規範と期待についてはどうか。子どもは手本になる友人を持っており、身近にも手本となる大人が存在している。また、学校には行動規範を示す規則が厳然とあり、教師も子どもを積極的に励ましている。しかし、子どもの生活のベースである家庭には守るべきルールが欠如している。

外的資産の4つのカテゴリーのうち、「建設的な時間の使用」は最も数値が低い。具体的な項目の中で「スポーツ、クラブ、その他の活動に参加している」は「Good」(2.2)の水準にある。ここには、いわゆる部活(体育系)の参加率の高さが反映されている。問題はそれ以外の活動の低さである。音楽や劇や芸術的な活動などへの参加は、外的資産26項目の中で最後から2番目に低い数値である。日本の学校では、部活(文化系)としてこの種の活動に多くの子どもが参加している。しかし、1.2というスコアは、体育系の活動に比べ参加者が著しく低いことを物語っている。

「建設的な時間の使用」の中で特筆すべきは、「お寺、神社、教会などの活動に参加している」のスコア(0.7)である。宗教教育が重要視される欧米の学校教育や家庭環境と比べると、文化的背景の違いから日本の子

どもには答えにくい質問であったと思われる。この質問は英文の調査では、「スピリチュアル・アクティビティ」の有無を尋ねている。日本の子どもには答えにくいという判断から、サーチ・インスティテュートとの協議により、質問内容を変えてはみたものの、日本の文化においては、儀礼的年中行事以外、定期的に宗教活動を行う習慣がないことがスコアの極端な低さとなったと考えられる。

次に、内的資産の蓄積状況を検討してみたい(表1の右側のスコア参照)。

表から分かるように、内的資産32項目のうち、2.1以上(「Good」)のスコアを示す項目は5項目、逆に、1.5以下(「Poor」)は7項目である。1.6のスコア(「Fair」)を示す項目が6項目あるが、これを「Poor」に含めると13項目となり、全項目の3分の1以上が「Poor」の水準に止まる。

カテゴリー別に詳しく見てみよう。「学習への参加」では、「宿題をする」が「Good」の水準にあるが、「学ぶことが楽しい」は「Poor」水準にある。また、「学校での学習もその他の活動も喜んでできる」も1.6と「Poor」水準に近い。子どもの多くは、宿題など義務的な活動はするが、学びや学習は必ずしも楽しい活動とは考えていない。

肯定的な価値観のカテゴリーでは特筆すべき項目が2つある。「タバコや酒などの誘いはことわる」(2.6)と「他人を手助けすることは大切だと思う」(2.5)である。外的・内的発達資産を測る58項目の中で、この2項目のスコアは最上位に位置している。前者は、唯一「Very Good」の水準にある。タバコや酒については、法的に禁止されていることに加え、近年における学校を中心とする健康教育の一つの成果と考えることができる。他人への手助けや支援を大切だと思う気持ちは、道徳的にも価値的にも重要である。実際に手助けや支援ができるか否かは別にして、高い数値を示すのはむしろ当然と言えるであろう。

以上の2項目を除くと、全体的にスコアは低い。特に、地域と関連した活動への意欲や態度に大きな課題を残す。例えば、「地域をよくするための活動への参加」(1.0)や「地域の人のためになることを進んでする」(1.0)、「社会問題の解決に役立つとする」(1.2)などの項目のスコアの低さがそれを証明している。また、「言いにくくても本当のことが言える」の項目についても、1.5と「Poor」の水準にある。人を傷つけたくないという優しさの反映ではあるが、視点を換えてれば、正義感の低さと理解することもできるであろう。

社会的能力のカテゴリーについてはどうか。「危険なものや健康に悪いものを避ける」や「悪い誘いを断ることができる」については「Good」の水準にある。しかし、「新しい友だちを作ることが上手」や「人を傷つけずに争いごとを解決できる」については「Poor」水準に止まっている。自己を防衛する構えや術はある程度身に付けてはいるが、人間関係を取り結ぶ力や調整する力は弱いと言える。

さて、内的資産の中で一番問題となるのは「肯定的アイデンティティ」のカテゴリーである。図表1で見たように、このカテゴリーの日米差は極端に大きく、アメリカの子ども21.2（「Good」）に対して日本の子どもは15.0（「Poor」）。両者の間に6.2ポイントの開きがある。

肯定的なアイデンティティは6項目から構成されているが、先に示したように、1.6のスコアを「Poor」に位置づけると、すべての項目が「Poor」の水準にある。一番衝撃的なのは、自己のアイデンティティの核を成す、「自分のことが好き」の数値が1.1と極端に低いことである。また、スコアを見る限り、「自分の将来に希望が持てない」「生きる目的意識がつかめない」などの将来展望の薄さや自信のなさ、自己統制能力の弱さなどが見られる。

一般に、アメリカの子どもは能力以上に自分自身を

肯定的に評価する傾向がある。逆に、日本の子どもは能力があっても自分自身のことをどちらかというと消極的、否定的に捉え、控えめに表現する傾向がある。しかし、この点を差し引いたとしても、日本の子どもの自己肯定感を含む肯定的なアイデンティティは低いと言わざるを得ない。

(3) 発達資産の蓄積状況と発達段階

以上、発達資産の獲得状況を全体で見てきたが、今度は発達段階別（小中高別）にスコアを見てみたい。図表2は、外的資産の蓄積状況を発達段階別に示す。

スコアの上では発達段階（小中高）の違いはあまりないが、外的資産の4つのカテゴリーとも小学生が最もスコアが高く、中学校、高校になるにつれそれが下がっている。図表1で見たように、4つのカテゴリーとも全体（平均）のスコアで21（「Good」）を超えたものはない。小中高別に見ると、小学生の場合、「建設的な時間の使用」を除く3つのカテゴリーは「Good」に近い。中高では、すべてが「Fair」の水準である。

では、具体的にどのような項目で、どのようなスコアの違いが見られるのか。ここでは、小学生と高校生との間に3ポイント以上の差がある「支援」と「規範と期待」の2つのカテゴリーに焦点を当て、詳しく分析してみたい。

図表2 「外的資産」の小中高比較

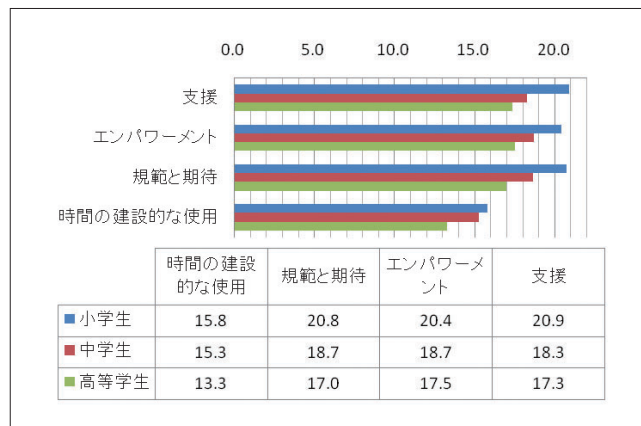


表2 外的資産カテゴリー「支援」の小中高比較

外的資産カテゴリー		全体平均	小学生	中学生	高等学生
支援	親にアドバイスを求める	1.5	1.7	1.4	1.4
	私の親は成功できるように手助けしてくれる	2.1	2.3	2.1	2.0
	私のことを心配してくれる近所の人がある	1.7	2.0	1.7	1.5
	私の学校は生徒を大切に、応援してくれる	1.9	2.1	1.8	1.7
	親以外に私を応援してくれる大人がまわりにいる	1.9	2.1	1.9	1.8
	私の家族は私を愛し、支援をしてくれる	2.1	2.2	2.0	2.0
	私の親は適切なアドバイスをしてくれる	1.9	2.1	1.9	1.7

表2に示すように、小学生の場合、「Very Good」(2.6以上)の水準に達する項目こそないが、7項目のうち、5項目が2.1以上(「Good」)の水準にある。一方、高校生では、2.1以上の項目はないが、2.0の水準が2項目ある。「私の親は成功できるよう手助けしてくれる」(小学生2.3)と「私の家族は私を愛し、支援してくれる」(小学生2.2)である。

両者の差に着目すると、まず、高校生の場合、「学校は生徒を大切に、応援してくれる」と「親は適切なアドバイスをしてくれる」の2項目で小学生に比べ0.4ポイント低い。両者の間で最も大きなポイント差が見られるのは、「私のことを心配してくれる近所の人がある」の項目(小学生2.0、高校生1.5)である。多くの高校生は地域から離れた学校に通っていること、また彼らは地域の行事等に参加する機会がないこともこの数値の低さに反映されていると考えられる。

「支援」のカテゴリーで、「親にアドバイスを求める」の1項目だけが、全体で1.5と「Poor」の水準にある。小学生にあっても1.7と相対的に低いスコアである。小学生にあっても全体的に支援の水準が高く、特に親に相談したり助言を求めたりする必要を感じていないとも理解できる。

表3は、もう一つのカテゴリー「規範と期待」の発達段階差を見たものである。

表3から分かるように、小学生と高校生の各項目のスコアにかなりの違いが見られる。なお、中学生は、ほとんどの項目で両者の中間のスコアを示している。小学生では、9項目中、5項目が2.1以上(「Good」)。これに対し高校生では、「私にとって良い手本となる友だちがいる」の1項目に過ぎない。

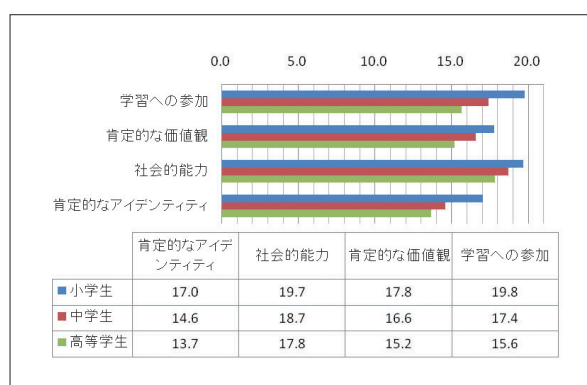
小中学生の場合、「手本となる友だちがいる」は2.4と高い水準にある。この項目については高校生も2.3と高い。しかし、「良い手本となる大人がまわりにいる」になると、小学生では2.3と高いスコアを示しているが、高校生では1.7と低く、ポイント差は0.6と最も大きい。このことも関連してか、高校生では「私を見守ってくれる近所の人がある」のスコアも1.4(小学生は1.9)と「Poor」の水準にある。

学校と家庭における規則と期待についての発達段階差は興味を引く。小学生の場合、「学校に明確な規則がある」の項目は2.3と高い数値を示し、「能力を伸ばし、励ましてくれる先生がいる」も2.1と「Good」の水準にある。これに対して高校生では、それぞれ1.9, 1.8「Fair」に止まっている。家庭の規則、期待についてはどうか。「家には守らなくてはならない明確な規則がある」は小中高を問わず最も低いスコアで1.4(「Poor」)である。小学生も1.6と低く、高校生は1.2と極端に低くなっている。しかし、「家族は学校の勉強

表3 外的資産カテゴリー「規範&期待」の小中高比較

外的資産カテゴリー		全体平均	小学生	中学生	高等学生
規範と期待	私にとって良い手本になる友だちがいる	2.4	2.4	2.4	2.3
	私の学校には明確な規則がある	2.1	2.3	2.2	1.9
	私にとって良い手本になる大人がまわりにいる	2	2.3	2.0	1.7
	私を育て、能力を伸ばすように励ましてくれる先生がいる	1.9	2.1	1.8	1.8
	私の家には守らなくてはならない明確な規則がある	1.4	1.6	1.4	1.2
	私の家族は学校で勉強を頑張るように励ましてくれる	1.9	2.1	1.9	1.7
	私を見守ってくれる近所の人がある	1.7	1.9	1.7	1.4
	私の学校は規則を公正に守らせている	1.7	1.9	1.7	1.6
	私の家族は私がどこで何をしているかを知っている	1.8	2.0	1.8	1.7

図表3 「内的資産」の小中高比較



を頑張るよう励ましてくれる」では小学生は2.1と「Good」の水準にあり、高校生も1.7と両者の間に0.4のポイントの開きはあるものの、特に低いとは言えない。日本の家庭における一般的な傾向がこのスコアに出ていると言えよう。

今度は、内的資産の獲得状況を発達段階との関係で見よう。図表3から明らかなように、先の外的資産と同様、内的資産にあってもその蓄積状況は4つのカテゴリーとも小学生の数値が一番高く、続いて中学生、高校生の順になっている。また、4つのカテゴリーそれぞれの小学生と高校生の数値を比較すると、「社会的能力」については1.9ポイント、「肯定的な価値観」については2.6ポイントの開きしかないのに対して、「学習への参加」は4ポイント、「肯定的なアイデンティティ」は3.3ポイントとその開きが大きくなっている。この差は何に由来するのか。以下、「学習への参加」と「肯定的なアイデンティティ」の2つのカテゴリーを取り上げ、具体的な項目間の数値の違いから見てみたい。

まず、「学習への参加」のカテゴリーである。表4に示すように、7項目のうち、学校種を問わず、「Good」(2.1以上)の水準に達しているのは、小学生の「宿題をする」(2.5)の1項目だけである。逆に、「Poor」(1.5以下)の項目は小学生にはないが、高校生では3項目(中学生1項目)と多くなる。

結果が示すように、宿題をきちんとする小学生は多い。しかし、「学ぶことが楽しい」になると、そのポイントを大きく下げ1.8の水準に止どまる。宿題については中学生では2.0、高校生になるとさらに下がり1.7の水準になる。また、「学ぶことが楽しい」の項目についても、中学生、高校生とも1.5以下(「Poor」)のスコアとなっている。「学習への参加」のカテゴリーのデータから、勉強嫌いで、宿題もしない、また、本を読むことや学習以外の他の活動に対しても意欲を欠く高校生像が浮かび上がってくる。

子どもの学びの現実とともに、無視できないもう一つの大きな課題が、「肯定的アイデンティティ」の問題である。先に見たように、日米差についてはこのカテゴリーが一番大きく、アメリカの子どもの方が6.2ポイントも上回っている。

表5に示すように、「肯定的アイデンティティ」は6つの項目から構成されているが、各項目の全体平均のスコアを見ると、すべてにおいて「Poor」、または「Fair」と「Poor」のぎりぎりの線上にある。

先にも指摘したように、肯定的アイデンティティを形成する上で核となるのは「自分のことが好き」であることが前提となる。悩み多き思春期のまっただ中を生きている高校生にあっては、ある程度の数値の低さは理解できるが、結果が示すように、0.9という数値(中学生1.0)である。多くの高校生は、「自分のことが嫌い」

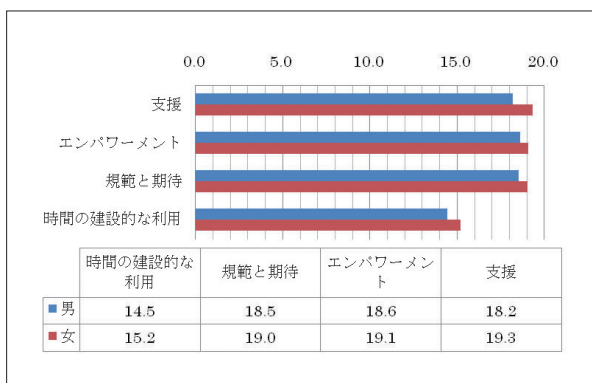
表4 内的資産カテゴリー「学習への参加」の小中高比較

内的資産カテゴリー		全体平均	小学生	中学生	高等学生
学習への参加	本を読むことや読んでもらうことが好き	1.7	1.9	1.7	1.5
	学校を大切にしている	1.8	2.0	1.8	1.6
	宿題をする	2.1	2.5	2.0	1.7
	学ぶことが楽しい	1.5	1.8	1.5	1.3
	積極的に新しいことを学ぼうとしている	1.7	1.9	1.7	1.6
	自分のためになることに挑戦するよう薦められている	1.8	1.9	1.8	1.7
	学校での学習もその他の活動も喜んでできる	1.6	1.8	1.6	1.4

表5 内的資産カテゴリー「肯定的なアイデンティティ」の小中高比較

内的資産カテゴリー		全体平均	小学生	中学生	高等学生
肯定的なアイデンティティ	自分の人生や将来を自分でコントロールできると思う	1.6	1.7	1.5	1.6
	自分のことが好き	1.1	1.4	1.0	0.9
	自分の将来に希望がもてる	1.6	2.0	1.6	1.4
	いらいらした気持ちをよい方法で解消できる	1.5	1.6	1.5	1.4
	難しいことに出会っても乗り越える力がある	1.6	1.7	1.5	1.5
	生きることの目的意識を見つけている	1.6	1.8	1.6	1.4

図表4 「外的資産」の男女比較



と回答していると理解してよい。問題は小学生であってもこの数値は低く、1.4に止まっている点にある。とはいえ、小学生の場合、自分の将来についてはそれなりの希望を持っている。「自分の将来に希望がもてる」の数値を見ると、小学生は2.0と「Good」に近い。一方、高校生は1.4と「Poor」の水準にある。高校生の場合、「生きることの目的意識を見つけつつある」の項目も1.4と「Poor」の段階にある。このスコアの低さは、将来展望が描けないことと深く絡んでいると理解することができるであろう。

(4) 発達資産の蓄積状況と性差

以上、外的資産、内的資産の蓄積状況を発達段階差の大きいカテゴリーに着目し、詳しく検討してきたが、次に、性差（男女差）に焦点を当てて見てみたい。

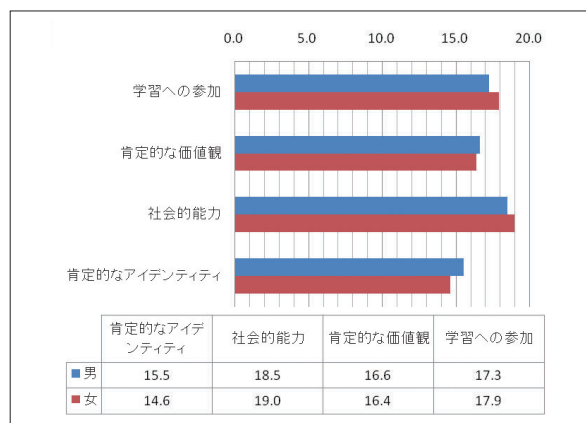
図表4は、外的資産を性別に見たものである。ここから分かるように、男女差はほとんど見られない。

4つのカテゴリーの中で男女差が一番大きいのは「支援」のカテゴリー（男性18.2、女性19.3）である。しかし、その差もわずか1.1ポイント。他の3つのカテゴリーでも女性の方が0.5～0.7ポイント男性を上回っているにすぎない。

全体的に性差は見られないが、外的資産の各カテゴリーを構成する具体的項目でみると、どうか。表は省略するが、0.2ポイント以上の開きのある項目を列挙すると、以下の6項目（26項目中）である。

「支援」では、「親のアドバイスを求める」（男性1.4、女性1.6）の1項目である。「エンパワメント」では、「家の手伝いや家族の決定ごとに加わっている」の項目（男性1.7、女性1.9）。「規範と期待」のカテゴリーでは、「私にとって良い手本になる友だちがいる」の項目（男性2.2、女性2.4）。最後の「時間の建設的な使

図表5 「内的資産」の男女比較



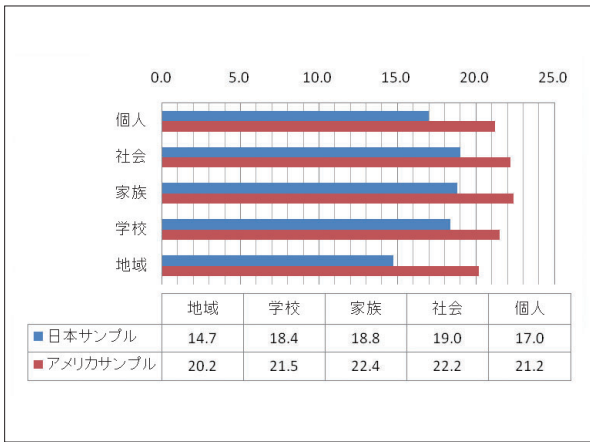
用」のカテゴリーでは、0.2以上のポイント以上の差が見られる項目が3つある。まず、「家で親と一緒に有意義な時間を過ごしている」の項目（男性1.8、女性2.0）である。次の「音楽、劇、芸術などの創造的な活動に参加している」の項目については、男性1.0、女性1.4と、0.4ポイント女性の方が高くなっている。以上の5項目はいずれも女性の方がポイントを上回っているが、「スポーツ、クラブ、その他の活動に参加している」の項目（男性2.3、女性2.0）については唯一、男性が女性のポイントを超えている。

上にみた6項目の男女のポイント差は、特筆すべき差ではなく、日本の子どもの男女の生活様式や行動様式の違いを理解すればむしろ当然の結果と言えるであろう。

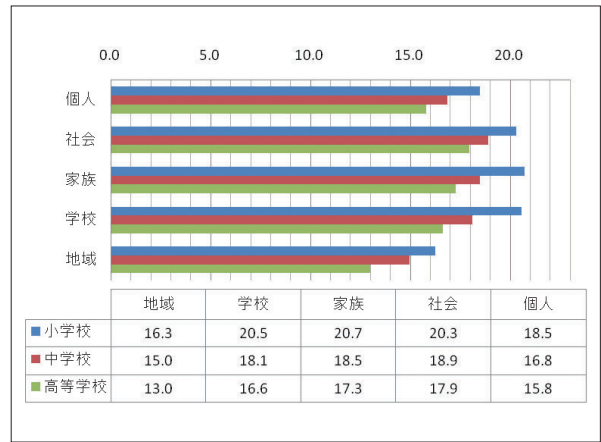
では、内的資産についてはどうか。図表5はその結果を示す。ここでも、男女差はほとんど見られない。最も大きな男女差は「肯定的アイデンティティ」のカテゴリー（男性15.5、女性14.6）で0.9ポイント、「肯定的な価値観」のカテゴリーでは男性16.6、女性16.4で、男女差はわずか0.2ポイントにすぎない。これらは、ほとんど無視できる差といってよいであろう。

以下、内的資産を構成する32項目の中で、0.2ポイント以上の男女差が見られた4項目だけ列挙しておきたい。「学習への参加」のカテゴリーでは、「本を読むことや読んでもらうことが好き」の項目（男性1.6、女性1.9）である。「肯定的な価値観」では「健康的な習慣を見つけている」の項目（男性1.8、女性1.6）、「社会的能力」では「他人の気持ちに共感できる」の項目（男性1.8、女性2.0）、最後の「肯定的なアイデンティティ」のカテゴリーでは「自分が好き」の項目（男性1.2、女性1.0）である。

図表6 「支援の場」に関する全体像



図表7 「支援の場」による小中高の比較



(5) 発達資産とそれを育てる5つの「場」

「発達資産プロフィール」調査は、上述したカテゴリー別の発達資産の蓄積状況を明らかにするだけでなく、発達資産を育てる5つの場との関連でスコア化できるように工夫されている。その場とは、個人、社会、家族、学校、地域の5つである。それぞれの場で獲得することが期待される資産項目は、次のとおりである。

- ①個人（資産）－自尊感情、正直、責任感、計画力などの心理的、行動的な強さ（13項目）、②社会（資産）－友情や大人の役割モデルなど、家族以外の人たちとの社会関係に基づく資産（13項目）、③家族（資産）－積極的な家族におけるコミュニケーション、質の高い家族での時間使用、明確な家族のルールなど（10項目）、④学校（資産）－明確かつ公平な学校のルール、教師からの激励や学習への動機づけなど（10項目）、⑤地域（資産）－スポーツやクラブへの参加、美術・音楽などの創造的活動、よき隣人を持つなど（12項目）。

図表6は、5つの場における資産の蓄積状況を見たものである。

図表6に示すように、アメリカの子どもの場合、「地域」を除き、4つの場とも21以上（「Good」）の数値を示している。これに対し日本の子どもは、「社会」の19.0が最高のスコアで、「地域」(14.7)と「個人」(17.0)のスコアが低い。

では、日本の子どもの状況を発達段階別にみるとどのような特徴が見られるか。図表7に示すように、発達資産が育つ5つの場は、小中高で少なからず違いが見られる。全体的にみると、小学生のスコアが最も高く、中学生、高校生になるとスコアが下がっている。小学生では、家族という場との関連で獲得される「家

族資産」のスコアが最も高く、ほぼ「Good」(20.7)の段階にある。「学校資産」「社会的資産」もそれぞれ20.5、20.3と相対的に高い水準にある。しかし、高校生になるとそれぞれ数値がかなり低下している。一番の問題は「地域資産」である。小学生でも16.3と低い。高校生になると、さらに数値が下がり「Poor」(13.0)に止まっている。

以下、発達段階別に見てスコアの差が相対的に大きい(3以上)3つの支援の場、すなわち「家族」「学校」「地域」に焦点を当て、それぞれを構成している項目間にどのようなスコア上の違いがあるのか、具体的に見てみよう。

まずは、家族である。表6に示すように、家族という支援の場で蓄積が期待される家族資産(10項目)は、先に見た外的資産の4つのカテゴリーそれぞれの各項目から構成される。全体で見ると、家族資産のうち、3項目が「Good」(2.1以上)の水準に入る。発達段階別にみると、小学生の家族資産の数値が高い。10項目のうち、7項目が「Good」の水準にある。中学生では2項目、高校生では1項目しか「Good」の水準に達していない。逆に、「Poor」の水準は小学生では1項目もないが、中学校では2項目、高校生では3項目と学年が進むにつれ増えてくる。ところで、家族資産の中で、発達段階を問わず、「Good」の水準にある項目が1項目ある。「家庭で安心・安全に過ごせる」である。「私の親は成功できるよう手助けしてくれる」と「私の家族は私を愛し、支援してくれる」の2項目もほぼこれに近い項目として理解してよいであろう。

次は、学校資産である。表7に示すように、学校資産は、内的資産の「学習へ参加」から5項目、エンパワーメントから1項目、外的資産の「支援」から1項目、「規範と期待」から3項目、合計10項目から構成

表6 支援の場「家族」の小中高支援

項目		全体平均	小学生	中学生	高等学生
家族	親にアドバイスを求める	1.5	1.7	1.4	1.4
	家庭で安心・安全に過ごせる	2.4	2.5	2.4	2.3
	家の手伝いや家族の決定ごとに加わっている	1.8	2.1	1.8	1.5
	家で親と一緒に有意義な時間を過ごしている	1.9	2.1	1.9	1.7
	私の親は成功できるように手助けしてくれる	2.1	2.3	2.1	2.0
	私の家には守らなくてはならない明確な規則がある	1.4	1.6	1.4	1.2
	私の家族は学校で勉強を頑張るように励ましてくれる	1.9	2.1	1.9	1.7
	私の家族は私を愛し、支援をしてくれる	2.1	2.2	2.0	2.0
	私の親は適切なアドバイスをしてくれる	1.9	2.1	1.9	1.7
	私の家族は私がどこで何をしているかを知っている	1.8	2.0	1.8	1.7

表7 支援の場「学校」の小中高支援

項目		全体平均	小学生	中学生	高等学生
学校	学校を大切にしている	1.8	2.0	1.8	1.6
	宿題をする	2.1	2.5	2.0	1.7
	学ぶことが楽しい	1.5	1.8	1.5	1.3
	学校で安心して過ごせる	2	2.2	2.0	1.9
	積極的に新しいことを学ぼうとしている	1.7	1.9	1.7	1.6
	学校での学習もその他の活動も喜んでできる	1.6	1.8	1.6	1.4
	私の学校には明確な規則がある	2.1	2.3	2.2	1.9
	私の学校は生徒を大切にし、応援してくれる	1.9	2.1	1.8	1.7
	私を育て、能力を伸ばすように励ましてくれる先生がいる	1.9	2.1	1.8	1.8
	私の学校は規則を公正に守らせている	1.7	1.9	1.7	1.6

表8 支援の場「地域」の小中高支援

項目		全体平均	小学生	中学生	高等学生
地域	自分と違う人を受け入れることができる	1.9	2.0	1.8	1.8
	自分の地域を良くするための活動に参加している	1	1.3	1.1	0.7
	お寺、神社、教会などの活動に参加している	0.7	0.9	0.7	0.4
	スポーツ、クラブ、その他の活動に参加している	2.2	2.1	2.3	2.0
	社会問題の解決に役に立とうとしている	1.2	1.3	1.2	1.0
	人に役立つ仕事や役割を与えられている	1.3	1.5	1.4	1.1
	他人を尊重する態度が育っている	1.6	1.7	1.6	1.6
	音楽、劇、芸術などの創造的な活動に参加している	1.2	1.3	1.2	1.2
	地域の人たちのためになることを自分から進んでいる	1	1.2	1.0	0.7
	私は安全な地域に住んでいる	2.2	2.3	2.2	2.1
	私のことを心配してくれる近所の人がある	1.7	2.0	1.7	1.5
	私を見守ってくれる近所の人がある	1.7	1.9	1.7	1.4

されている。

全体で見ると、「Good」の水準が2項目、「Poor」も2項目あるが、学校資産の蓄積状況は決して低い数値ではない。発達段階別に見ると、ここでも小学生の数値が高く、「Good」の水準は5項目ある。「Poor」の水準は1項目もない。逆に、高校生では、「Good」の水準は1項目もなく、「Poor」が2項目になる。学校資産の中には小中高が共に「Good」に達する項目はないが、「私の学校には明確な規則がある」と「学校で安心して過ごせる」は「Good」に近い水準にある。

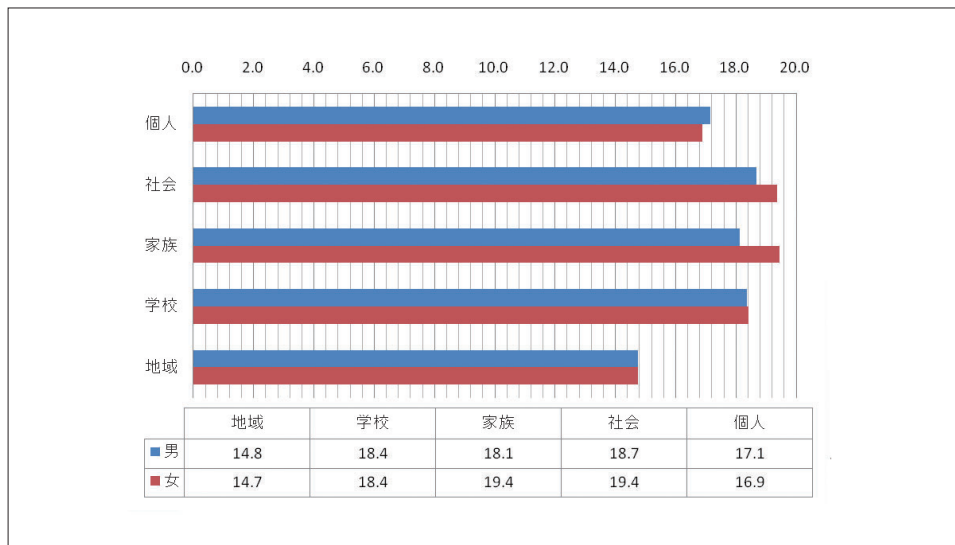
もう一つは、地域資産である。発達資産を育てる環

境(場)としての地域の持ち意味・価値は大きい。しかし、表8の結果が示すように、子どもの地域資産の蓄積状況は極めて低い。

まず、全体で見ると、12項目の中で「Good」の水準に達しているのは2項目のみである。逆に、「Poor」の水準の項目が6項目と多い。発達段階別に見るとどうか。「Good」は小学生で2項目、中学生で2項目、高校生は1項目にすぎない。「私は安全な地域に住んでいる」については、発達段階を問わず「Good」の水準にある。

「Poor」についてはどうか。小中高それぞれ6項目、

図表8 「支援の場」別の男女比較



6項目、8項目と多い。これらの中で、発達段階を問わず、「Poor」の水準にある項目が6項目ある。「Poor」のスコアが高い順に挙げると、「お寺、神社、教会などの活動に参加している」、「地域の人のためになることを自ら進んでする」、「自分の地域をよくするための活動に参加している」、「社会問題の解決に役立つとしている」、「音楽、劇、芸術などの創造的な活動に参加している」、「人の役立つ仕事や役割を与えられている」、の6項目である。

宗教的な活動を除くとしても、子どもの地域参加は少ない。子どもを育てる環境としての地域の教育力の低さの反映でもある。

最後に、発達資産を育てる（育つ）5つの場と男女差について触れておきたい。

図表8から分かるように、全体では、5つの資産の

うち、社会資産（男性18.7、女性19.4）と家族資産（男性18.1、女性19.4）にそれぞれ0.7、1.3のスコアの違いがみられるが、他の3つの資産については、男女の差はほとんどないと言ってよい。5つのそれぞれの資産を構成している具体的な項目についても検討してみたが、特記すべき男女差は見られない。とはいえ、男女の資産蓄積状況を知るとともに、そこにどのような課題があるかを明らかにすることは重要である。先に、発達段階との関連で「家族資産」「学校資産」「地域資産」の蓄積状況を検討しているので、ここでは、残りの「個人資産」と「社会資産」を取り上げ、スコアの特徴を見てみたい。

表9は、「個人資産」の男女別スコアを整理したものである。「個人資産」は、発達資産の4つのカテゴリーに含まれている13の具体的な項目から構成されている。「個人資産」全体のスコアは1.7で「Fair」の水準（男

表9 支援の場「個人」の男女比較

項目		全体平均	男性	女性
個人	正しいと思うことは、はっきりものを言う	1.7	1.7	1.6
	自分の人生や将来を自分でコントロールできると思う	1.6	1.6	1.6
	自分のことが好き	1.1	1.2	1.0
	危険なものや健康に悪いものは避ける	2.1	2.1	2.1
	本を読むことや読んでもらうことが好き	1.7	1.6	1.9
	タバコや酒などの誘いはこたわる	2.6	2.5	2.6
	自分の将来に希望がもてる	1.6	1.6	1.6
	いらいらした気持ちをよい方法で解消できる	1.5	1.5	1.5
	先を見通して適切な判断ができる	1.7	1.7	1.7
	自分がやったことには責任が取れる	1.8	1.7	1.8
	言いにくくても本当のことが言える	1.5	1.5	1.5
	生きることの目的意識を見つけつつある	1.6	1.7	1.6
	健康的な習慣を身につけている	1.7	1.8	1.6

表10 支援の場「社会」の男女比較

項目		全体平均	男性	女性
社会	新しい友達をつくるのが上手	1.5	1.5	1.5
	悲しみや喜びなどをきちんと表現できる	1.9	1.9	2.0
	難しいことに会っても乗り越える力がある	1.6	1.6	1.5
	他人を手助けすることは大切だと思う	2.5	2.4	2.5
	悪い誘いを断ることができる	2.3	2.3	2.4
	人を傷つけずに争いごとを解決できる	1.6	1.6	1.6
	他人に大切にされたり、感謝されたりしていると思う	1.6	1.5	1.6
	自分のためになることに挑戦するよう薦められている	1.8	1.8	1.8
	他人の手助けをするよう進められている	1.7	1.7	1.7
	他人の気持ちに共感できる	1.9	1.8	2.0
	私にとって良い手本になる友だちがいる	2.4	2.2	2.4
	私にとって良い手本になる大人がまわりにいる	2	2.0	2.0
	親以外に私を応援してくれる大人がまわりにいる	1.9	1.9	2.0

性1.7, 女性1.7)にある。具体的な項目で見ると、「Good」(2.1以上)の水準に入る項目は男女とも2項目、逆に「Poor」(1.5以下)の水準は男女とも3項目である。個々の項目の数値を見ても、男女の差はほとんどないと言ってよい。

男女とも、「タバコや酒などの誘いを断る」や「危険なものや健康に悪いものを避ける」態度は強く持っている。しかし、「自分のことが好き」と回答した者は極めて少なく「Poor」の水準(男性1.2, 女性1.0)にある。いずれもその背景には、「言いくくても本当のことが言えない」もどかしさ、「いらいらした気持ちをよい方法で解消できる」術をもたないからだ、また「自分の将来に希望がもてない」、などの要因が絡んでいると思われる。

「社会資産」についてはどうか。この資産を構成する具体的な項目は、外的・内的資産の6つのカテゴリから抽出された13項目である。表10は、社会資産の蓄積状況を性別に整理したものである。

13項目の平均は19.0で「Fair」の水準にある。男性18.7, 女性19.4で、その差はほとんどないと言ってよい。具体的な項目で見ると、男女とも2.1以上(「Good」)の水準にあるのは3項目、逆に1.5以下(「Poor」)の水準は1項目のみである。

子どもたちは、身近に手本となる友だちや大人を持っているし、他者への手助けや援助は大切であるという道徳心を持ち、悪い誘いを避ける態度も身に付けている。しかし、他者の気持ちに共感できる力をそれなりに持ちながらも、新しい友だちをつくるのが苦手で、他者を傷つけずに問題を解決する技や困難を乗り越える力などを欠いている。社会資産の蓄積という観点から見た問題点はここにある。

3. 結果の考察

調査結果の分析はまず、日米の子どもの発達資産の蓄積状況の比較から始めた。図表1で見たように、アメリカの子どもの場合、一地域のサンプルであり一般化はできないとしても、発達資産(外的・内的資産)の8つのカテゴリのうち、ほぼ7つが「Good」(21以上)の水準にある。これに対して日本の子どもは、6つのカテゴリが「Fair」(20~16)、2つのカテゴリ(「時間の建設的な使用」「肯定的なアイデンティティ」)については「Poor」(15以下)の水準に止まっている。

アメリカの社会では青少年非行や犯罪が多発し、子どものメンタルヘルスの悪化が社会問題化している。この点は日本でも大差ない。それにもかかわらず、日米の子どもの発達資産の獲得状況の違いは何に由来するのか。

アメリカの子どものスコアの相対的高さは、誤解を恐れずに言えば、民主社会を支える自立的な市民を育てるというアメリカにおける伝統的な教育の目標とその実現に向けた実践的努力にある。個人主義社会に生きるには他者との人間関係や問題解決力、何より学ぶ意欲や自己肯定力が求められる。日本は必ずしも個人主義社会ではないが、社会の仕組みの複雑化や高度化により上記の力や意欲はアメリカ社会に劣らず求められていると言える。しかし、現実には、学力の向上と上級学校の進学に学校教育の目的が矮小化され、家庭教育は学校教育の後押しする機能しか発揮していない。地域の教育力の低下はこの傾向を強めている。

発達資産の蓄積状況の日米差を理解する上で無視できないのは、資産を育てる場や環境のもつ力である。図表6で示したように、発達資産を育てる5つの場に関するスコアは、すべてアメリカの方が上回り、「地域資産」(20.2)を除き、「Good」の水準にある。日本

では「地域資産」を除き、すべて「Fair」で、「地域資産」については「Poor」(14.7)となっている。アメリカの数値の相対的高さは、子どもの発達資産の蓄積や育成を可能にする場(環境)が整備され、子どもの資産蓄積に関わる大人たちの積極的な支援とともに、子どもとの関わりの中で大人自身が発達資産を高めていることを意味している。

言うまでもなく、本研究の目的は日米比較ではない。日本の子どもの発達資産の蓄積状況の分析とそれ支援する場(環境)の現実理解に焦点を当てている。

日本の子どもの発達資産の蓄積状況を発達段階別(小中高別)に分析した結果によれば、外的資産・内的資産の8つのカテゴリーのすべてにおいて小学生の数値が最も高く、続いて中学生、高校生の順となっている。各カテゴリーを構成する具体的な項目のスコアを見ても、58項目中1項目を除き全ての項目で小学生のスコアが一番高く、中学生、高校生の順になっている。項目によっては中学生、高校生に高いスコアを期待したいところであるが、実際はそうになっていない。年齢が増すにつれ現実を見る目や他者の自分に対する評価などに厳しくなることを考えればある程度頷ける。

内的資産の中で特に気になるのは、「肯定的アイデンティティ」と「肯定的価値観」のカテゴリーのスコアである。前者は自己統制力や自尊心、目的意識、将来展望などから構成されているが、中学生も高校生も「Poor」(それぞれ14.6,13.7)の水準である。後者は、思いやりや平等感、正義感、責任感、自制力などの資質を問う項目から構成されているが、高校生にあっては、ほとんど「Poor」(15.2)段階にある。日本の高校生の精神的発達状況の問題を浮き彫りにしていると言える。

ところで、問題は日本の子どもの発達資産の蓄積の低さの原因を探るよりも、低いスコアに止まっているカテゴリーや具体的項目に対して、誰が、どのような場で資産を増やしていく努力や支援をしていくかである。

本研究では、子どもの発達資産を育てる(育つ)5つの場(個人、社会、家庭、学校、地域)における資産の蓄積状況の分析も試みている。図表6で既に見たように、アメリカの子どもは地域という場で蓄積することが期待される資産(地域資産)を除き、4つの場における資産の蓄積スコアは「Good」の水準にある。これに対して日本の子どもの場合、地域資産を除き、4つの場におけるスコアは「Fair」の段階に止まって

いる。アメリカでも「地域資産」が「Good」の水準に達していない(20.2)という点では問題を残すが、日本の場合、そのスコアはわずか14.7(「Poor」)にすぎない。その差は何に由来するのか。アメリカの多くの親や地域住民は、地域における子ども支援の各種の団体、組織にかかわっているとされる。スコアから言うと決して十分とは言えないが、アメリカの大人たちの発達資産の高さの反映であると理解することができるであろう。

日本の場合、地域資産だけでなく他の資産の蓄積状況も決してよいとは言えない。以下、5つの場で蓄積が強く望まれる具体的な資産項目(小中高の平均スコア1.5以下、及び1.6)を列挙してみたい。どのような場で、誰が責任をもって子どもとかわるかを知る目安となるであろう。

① 個人資産

- ・自分のことが好き」(1.1)
- ・「言いにくくても本当のことが言える」(1.5)
- ・「生きる目的意識を見つけつつある」(1.6)
- ・「いらいらした気持ちをよい方法で解決できる」(1.5)
- ・「自分の人生や将来を自分でコントロールできると思う」(1.6)
- ・「自分の将来に希望がもてる」(1.6)

② 社会資産

- ・「新しい友達をつくるのが上手」(1.5)
- ・「難しいことに会っても乗り越える力がある」(1.6)
- ・「人を傷つけずに争うごとを解決できる」(1.6)
- ・「他人に大切にされたり、感謝されていると思う」(1.6)

③ 家族資産

- ・「親にアドバイスを求める」(1.5)
- ・「私の家には守らなくてはならない明確な規範がある」(1.4)

④ 学校資産

- ・「学ぶことが楽しい」(1.5)
- ・「学校での学習もその他の活動も喜んでできる」(1.6)

⑤ 地域資産

- ・「自分の地域を良くするための活動に参加している」(1.0)
- ・「お寺、神社、教会などの活動に参加している」(0.7)
- ・「社会問題の解決に役に立とうとしている」(1.2)
- ・「人に役立つ仕事や役割を与えられている」(1.6)

- ・「音楽、劇、芸術などの創造的な活動に参加している」(1.2)
- ・「地域の人たちのためになることを自分から進んでやる」(1.0)

Ⅲ 成果と今後の課題

本研究は、アンケートに基づく子どもの発達資産に関する研究として日本で最初の試みであると思われる。量的にも14,000人の子ども(小中高生)を対象としており、日本の子どもの発達資産の蓄積状況の全体像をほぼ把握することができたと自負している。「発達資産プロフィール」調査は、外的・内的資産の8つのカテゴリーのスコアの高低を知り、スコアの低いカテゴリーの資産の蓄積をどのように支援し、高めるかに主眼が置かれている。本研究では、発達資産の概念それ自体がまだあまり知られてない状況もあり、各カテゴリーを構成している具体的な項目についてもスコア化を試みた。これにより、日本の子どもは内的・外的資産のどのカテゴリーの資産蓄積に問題があるのかだけでなく、どのような具体的な内容項目に課題を残すのか、この点を明らかにすることができた。

具体的な項目のうち、どのような内容のスコアが高く、逆に低いかについては特に新しい発見はない。日本の多くの研究や具体的な調査等で明らかにされたものと大差ない。ただ、問題は個々ばらばらに存在しているのではない。低スコアの項目が発達資産のどのカテゴリーに入るのか、また、資産が育つどのような場に問題があるのか、また、誰が責任を持って資産蓄積に向けた支援するのか、これらの点を発達資産の枠組みの中で位置づけ、明示できたと考える。

以上のような一定の成果とともに、反省点も少なからずある。まず、アメリカの一つの地域におけるデータ(サンプル)を多用したことである。アメリカのデータを入手するためサーチ・インスティテュートに問い合わせたところ、集積されたデータはなく、それを検討している、ということであった。今後の課題にもなるが、アメリカのデータを入手し、客観性の高い、より詳しい比較研究ができればと考えている。もう一つは、翻訳上の問題である。翻訳には細心の注意を払ったつもりであるが、小学生5,6年生段階では回答しにくい、難しい質問項目(例えば、「人生や将来を自分でコントロールできる」「生きることの目的意識を見つけつつある」など)が少なからずあったと思われる。「発達資産プロフィール」調査がアメリカで開発

され、アメリカの文化に馴染みの深い項目で構成されていることも否めない。しかし、宗教教育にかかわる項目を除くと、日本の子どもにとって特に違和感を抱かせるような項目はないと思われる。

最後に、今後の研究課題を1つだけ指摘しておきたい。先にも指摘したように「発達資産プロフィール」調査は、調査そのものを目的にしたものではなく、不足がちな資産項目を発見し、それを増やしていく教育プログラムを準備するところに主眼がある。アメリカでは、サーチ・インスティテュートが開発した各種の教育プログラムが多く地域で展開されている。また、アメリカには価値を育てる非宗教的な教育プログラムも多く存在する⁽⁴⁾。共同研究者のウィルソンは2度に渡り各種の講習会に参加するため渡米している。彼女が蓄積したノウハウを基礎に、日本社会に適合した実践的な教育プログラムを開発すること。これがわれわれに課せられた当面の研究課題である。

〈引用及び参考文献〉

- (1)Lerner, R. M. and Benson, P. L. (2003), *Developmental Assets and Asset-Building Communities: Implications for Research, Policy, and Practice*. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York, P.20.
 - (2)Scales, P. & Lefert, N. "Developmental Assets: A Synthesis of the Scientific-Research on Adolescent Development" (1999), Search Institute (Minneapolis), PP'8-9.
 - (3)発達資産のアメリカのデータは、Developmental-Assets Profile (User manual), Fall, 2005 Search Institute (Minneapolis), P63を参照
 - (4)岩野雅子、ウィルソン・エイミー (2007)『子どもの社会科を促す価値教育の可能性について：フルサークルラーニング・プログラム実践を通じた子育て文化創造支援に向けて』山口県立大学国際文化学部紀要、第13号、7-20頁
国立教育政策研究所社会教育実践研究センター発行 (2006)『子どもの成長過程における発達資産についての調査研究報告書』
立田慶裕・岩槻知也 (編) (2007)『家庭・学校・社会で育む発達資産：新しい視点の生涯学習』、(株)北大路書房
- Scales, P.C. and Leffert, N. (2004), *Developmental Assets: A Synthesis of the Scientific Research on*

Adolescent Development. Search Institute, Minnesota.

Scales, P.C. and Sesma, Jr., A., (2004) *Coming into Their Own: How Developmental Assets Promote Positive Growth in Middle Childhood*. Search Institute, Minnesota.

Scales, Peter, Arturo Sesma, and Brent Bolstrom. "*Coming into their Own: How Developmental Assets Promote Positive Growth in Middle*

Childhood" (2004), Search Institute (Minneapolis).

※

サーチ・インスティテュートのPeter Bennett氏及びEugene Roehlkepartain氏からは資料の紹介や翻訳上の諸注意等について親切にご指導いただいた。この場を借りて心より感謝の意を表したい。